

ビジョンは進展する

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授
 順天堂大学国際教養学部 教授
 一般社団法人 がん哲学外来 理事長
 「明日を考える会 ～次世代の社会貢献～」
 会長 樋野興夫

長野朝日放送から、DVD『明日へのアクション：信州がんプロジェクト～知ろう、考えよう、がんのこと～第84回ハートフルメッセージ「信州大学がん哲学外来 in 軽井沢」』（2018年4月24日放送）が送られて来た。『サンデー毎日』（2018年5月20日号）では「開設10年 患者・家族最後のよどころ～がん哲学外来 言葉の処方箋」（156～159ページ）が掲載されていた。

『日経デュアル DUAL』の「がん患者 ベアレンツ（代表：西口洋平氏）と樋野先生の対談」の記事が公開されたとの事である。「がん患者ベアレンツ」とは「子どもを持つがん患者のためのコミュニティ」で「インターネット上のグループ」で現在全国に会員が1600人との事である。素晴らしい活動である。対談後編の記事は『夫は妻の余計なおせっかいに、妻は夫の冷たさに悩む（<https://bit.ly/2x4LIbe>）』である。

『最強の健康法 病気にならない最先端科学編～世界レベルの名医の「本音」を全部まとめた～』（SB Creative 社発行）が送られてきた。私の特別寄稿の『「クオリティ・オブ・デス」から良い人生を考える』（441～447ページ）が紹介されていた。その中に「利己的でハッピーな人よりも、利他的でジョイフルな人の方が人生は輝く」があり、「自分のために追求する表面的な幸せではなく、人のために生きる事で内側から湧き上がる喜びこそが、人生

を輝かせる」と記載されている。まさに「ハッピーとジョイフルは違う」「ハッピーは外面的。いつでも失望に終わる。ジョイフルは心から溢れるもの」を実感する日々である。

今年（2018年）のゴールデンウィークの最大の思い出は、『ショートクルーズ』に招かれ、船上（ダイヤモンド・プリンセス）で『がん哲学～人生ピンチヒッター～』と『がん哲学～空っぽの器～』の2回、講演の機会が与えられた事であろう（4月28日～5月2日）。大変有意義な時であった。『すべての始まりは「人材」である。「目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし」、「最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである」（新渡戸稲造）』の教訓が、クルーズの旅で大海を見ながら鮮明に甦った。まさに「大海を見ながら教養を深め、世界の動向と時代を読む」である。クルーズは私も wife も初めての経験であった。参加者の皆様には、本当に、お世話になった。人生の忘れ得ぬ 思い出となった。

5月4日は、「万座ミュージカル & クルーズ」の参加者との「池袋カラオケ大会」の集いに、wife と赴いた。私は『すきま風』（杉良太郎）、『おまえに』（フランク永井）、『くちなしの花』（渡哲也）、『四季の歌』（芹洋子）、wife は『Honesty』（Elton John）、『Top of World』（Carpenters）、『How Great Thou Art』（Elvis Presley）、『I could have danced all night』（Audrey Hepburn）を歌った。皆様の美声を拝聴しながら感動の時であった。カラオケは久しぶりである。今後も、定期開催される事であろう。

「進歩と保守の一致する所、旧と新との融合する所、そこに真醇なるものが生起する」（内村鑑三）の言葉が身にしみる今日この頃である。『明日を考える会～次世代の社会貢献～』の存在意義として、『「ビジョン」は人知・思いを超えて進展する』（新渡戸稲造）ものである事を、痛感する日々である。



「宗教と科学の狭間にて」

宮崎 敬爾

私はキリスト教主義の学校で自然科学を学んだ立場から、宗教と科学の現代社会との関わりについて私人生を通して考えてみた。

学生の頃は、神という創造主が見つかった真理に科学はどこまで迫れるかという理性と聖書マタイ7:7の「求めよ、さらば与えられん」やスクールモットー「Mastery for Service」（奉仕のための練達）からくる感性が漠然とあった。その後社会にでると、二元的な思惟は薄れ煩惱のまま人生を送っていた。科学がもたらした豊かな物質文明や健康長寿社会を実感しつつも、神への感謝や畏怖を省みることがなかった。私にとって宗教は非日常に過ぎなかった。

家内ががんを患った時も、先端医療や免疫力という科学の

力だけに頼っていた。彼女は「がん哲学外来」にしながら、先進治療への希みを捨てず天寿がんげ入れた。やがて緩和ケアのお世話になり天寿をうした。この世は不条理だと痛感した。

あの日から私は宗教の助けを求めようになった。実家が浄土真宗だったので築地本願寺で八百年前の親鸞の教えを知り、本願他力に委ねるようになった。宗教は日常となった。

科学はからだやこころのことを理解させるが、命や死については宗教の存在なくして無力であると思った。最近若い僧侶が免疫や遺伝子のことに熱心だったり、外科チームが大きな手術の前に歎異抄を読むという話を耳にする。現代社会はもうそうせざるをえない時代に入ったということでしょう。宗教と科学の境界をこえた社会救済にこれからも注目したいものだ。



明日を
考える
ヒント

＜作家の名言から＞

- ・人生とはおもしろいものだ。何かひとつを手放したら、それよりずっといいものがやってくる。（サマセット・モーム：作家）
- ・人生は一枚の銀貨のようなものだ。それをどう使おうと勝手だが、使えるのはたった一度きりである。（セルバンテス：作家）